



気になるあいつ  
わかぎゑふ

双葉社

## ちやちやちや

大阪弁の芝居を書いて演出している。うちの劇団リリパットアーミー  
監の最新作「ちやちやちや」という芝居だ。なにが「ちやちやちや」か  
というと、大阪弁の「ちやつちやとしーや」とか「ちやうちやう」「め  
ちやくちや」の「ちや」という言葉の響きをタイトルにしたのである。  
大阪弁は本当に「ちやちゆちよ」の多い言葉だ。大阪人が2人集まると  
「ちやちやちや」と言い合っているようなものである。

「ちやつちやとしーや」

「ちゃちゃつとしたらええんやろ？」

「ちゃうがな、ちゃつちやつていうてるんちゃううんか？」

「そないちやつちやつできへんわ」

「それつてめちやくちや遅いんちゃうか？」

「ちゃうちゃう、そない遅うないで」

大阪人ならちゃつちやつと読めるこの文章も、地方の人が読んだら「なんのこつちやつ？」だろう。まったく大阪弁はちゃちゃちゃのリズムで出  
来上がっている。

で、その芝居もじきに本番だ。大阪公演は一月末から二月の一週目までの一週間である。本番前の演出は忙しい。体が24時間フル回転して  
るような状態でも仕事は尽きない。寝食を忘れるというが、「寝食つてな  
に？」という状態である。

今回の写真はその芝居のセットである。一見実物に見えるだろうが、実は30分の1の模型である。大きな公演になると舞台美術家がセットの縮尺模型を作ってくれるのだ。役者はそれを見て自分がどんな舞台に立つか想像を膨らませる。もちろん演出も同じだ。模型を見つつシユミレーションを繰り返し、本番の二日ほど前に立ち上がるセットの中でどう芝居させるかを考える。照明家も同じ、どんなところに灯りを当てるか模型があれば考えられるが、なければ自分の想像にだけ頼ることになるので誤差が出来てしまうわけだ。

だからこの写真に写っている模型は稽古の段階では自分たちが作る芝居の抛り所なのである。演出をしてればこの模型が一番気になる存在になる。「ここに人は何人くらい立てるのか？ 実際にはどんな空間なんだろう？ 色はどうなんってるのか？」そんなことを思いつつ、やはり縮尺で作ってもらった人形を立てて模索する。ある意味ドールハウス好きの万年少女みたいなおばさんと変わりのない世界でもある。

しかし、舞台美術家というのはたいへんな仕事だと思う。脚本を読み込んでセットの絵を起こし、それを実際に舞台の上に建てるように計算して、模型まで作るのだから凄いのひと言に尽きる。脚本を読む読解力と、絵描きの才能と、建築家の計算力と模型技師の精密さを兼ね備えてないと出来ないのだから…。

それに比べれば表の顔といわれてる役者なんて自分勝手なポジションである。ま、演出もそうだが…。

ともかく今はこの模型が私が芝居を作る上での命綱だ。絶対に切れてもらっては困る。それくらい大事な大事な模型なので、携帯の待ち受け画面にもしている。しばらくはこれがないと生きていけない現状である。

リリパットアーミーⅡ 第41回公演

『ちやちやちや』〈ある洋服職人の物語〉

詳しくは玉造小劇店ホームページへ。

↑クリック↑

---

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇団」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。

---